

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



歌の練習に集まり、笑顔が生まれる（大槌童謡を歌う会）

特集 歌声を重ね、まじわる

● 歌で分かち合う、心のふるさと ③
大槌童謡を歌う会（岩手県大槌町）

● 20年以上続く「自宅カラオケサロン」
熊田留男・ミサヲさん夫妻（福島県郡山市） ⑤

● カラオケに集い、育む絆 ⑦
鹿野カラオケ愛好会（宮城県仙台市太白区）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント
（岩手県立大学 社会福祉学部 准教授 齋藤 昭彦さん）

まじわる災害公営住宅④ ⑨
玉浦西交流会（宮城県岩沼市）

平成 28 年度 宮城県サポートセンター支援事務所の活動 ⑩

東北の元気⑧ ⑫
天栄米栽培研究会（福島県天栄村）

私の地域の元気興し「S-1グランプリ 第3回いがす大賞」⑪ ⑬
寄合処 とやけの花（宮城県石巻市）

平成・向こう三軒両隣事情① ⑭
ご近所福祉クリエイション主宰 ご近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

生きがい仕事⑬ ⑯
手づくりくらぶ Arabesque（宮城県仙台市若林区）

特集

まじわね、 歌 声

子どもも、大人も、お年寄りも、
馴染みのある歌や思い出のある歌をもっています。

地元の伝統的な歌や、学校で教わる歌、家族がよく口ずさむ歌、
たいせつな人と歌う歌、自分の背中を押してくれる歌・・・

過ごした時代や地域によっても、
流行りや好みに違いがありますが、
歌は誰とでも楽しめて、
新たな出会いにつながることもあります。

何人かで集まって、声を出して思いっきり歌えば
体も心もスッキリするし、
グループで過ごすあたたかさも感じられます。

よく顔を合わせるメンバーでは、会話にたくさんの花が咲き、
ときに互いの体調を思いやったり、
元気な自分であることに努めようとするきっかけにもなります。

集まりの回数を重ね、歌声を重ねることは、
長く人生を謳歌する秘けつかもしれません。



各パートを聞きながらハーモニーを作り出していく練習風景

歌で分かち合う、心のふるさと

◎大槌童謡を歌う会（岩手県大槌町）

ライター：元持幸子

ポイント

- 童謡を歌うことが生きがいとなり、皆で震災を乗り越える力に
- 歌の練習や発表の機会が、歌う仲間同士のふれあいや健康を促進

毎月3回月曜日の午後、大槌童謡を歌う会（以下、童謡の会）の練習時間。「母さんお肩をたたきましょー」タンントン」など、聞き覚えのあるメロデーと、歌詞を口ずさみたくなる曲が聞こえてくる。岩手県大槌町の集会所で、歌っているのは平均年齢70歳のメンバー総勢32人。「みんなで歌うことが、本当に楽しいんです」と、代表を務める阿部恵子さん（72歳）は、童謡唱歌の魅力を話してくれた。

童謡唱歌は、幼い頃の子守歌や遊びの中で歌い、記憶の片隅に残っているような曲が多い。時代を超えて歌い継がれる、馴染みのある曲が多く、「童謡は、いつでも、どこでも、誰でも歌える心のふるさと」と言われることもある。童謡の会が発足したのは1989年。歌を歌うことを、地域の仲間づくりと健康増進に役立てようと、歌や音楽の愛好家が集まった。会では、コンサートや地域イベントのステージに向け、練習

東日本大震災の影響で、その環境は一変。童謡の会メンバーの命も奪われた。避難所や応急仮設住宅での生活、町外への避難で、メンバーはバラバラとなり連絡の取れない状況だった。2011年6月、「集まって、歌を歌いたいね」という呼びかけに、連絡のついたメンバー6人が集まった。

ピアノ伴奏は無くても、身体から歌詞とメロデーが次々湧いてくる。あわせて、避難所生活を乗り切る元気も湧き出てきたと、メンバーたちは当時を振り返る。また、当時町外避難していたメンバーの1人は、仲間と一緒に歌いたいという思いで、避難先から週1回の練習に通ってきていた。歌を通じて助け合える仲間の存在が、避難生活を乗り切る支えとなっていたようだ。

同年11月、「岩手県童謡

歌の力と仲間の力

に張り合いをもち活動していた。

大槌童謡を歌う会 会長 阿部 恵子さん

「助け合いながら運営するのが長続きの秘けつ」



唱歌のつどい」という、岩手県内にある歌の会同士の交流会へ参加することを決めた。メンバーへ連絡を取り合い、練習を重ねた。「自分たちが歌うことで、地域を元気づけ、支援してくれた方々へ感謝を伝えたい」。そのような思いで、童謡を歌う会のメンバー全員がステージに立っていた。

「歌うことで、気持ちを表に出すことができるんです。悲しい時に悲しい曲を歌うと、深刻にならずに心が落ち着き、うれしいときは、みんなで楽しい歌で分かち合えるのが歌の良さですね」。メンバーのひとり、及川忠利さん（86歳）は歌の力を実感している。

地域のハーモニーづくり

「みんなで助け合いながら、会を運営していることが長続きの秘けつ」と、阿部さんは、週1回の練習を楽しみにしている。全体練習の時間以外でも、イベントの打ち合わせや日程調整、世間話など、



そろいのユニフォームでステージ発表

話題の絶えない、にぎやかな集まりとなっている。

現在、童謡を歌う会は、町内の仮設集会所や福祉施設でのミニコンサート開催、文化祭や地域イベントへの参加を積極的に行っている。コンサートでは、そろいのシャツを着てステージに立ち、ピアノ伴奏に合わせて歌を披露する。きれいなハーモニーとなったときの感動は、忘れがたいものとなっている。

童謡唱歌は幅広い年代で聞かれていて、懐かしい曲や聞き覚えのある曲が流れると、誰でも口ずさんで一緒に歌うことができる。コンサートでは、

歌う側と聞く側の距離が縮まり、会場が一体感をもつ雰囲気となるそうだ。

「ステージに立つには、歌詞や音程をしっかりと覚えることもたいせつです。認知症予防や健康づくりにもなっていますね（笑）」と、阿部さん。楽譜を片手に、ピアノで音を取りながら、声を出して音を覚えていく。声をしっかりと出すため、背筋を伸ばし、口を大きく動かし、全身を使って繰り返し練習することが必要だ。馴染みのある曲も、アレンジや編成によって歌い方や音程が変わるため、年間20曲以上、新たにチャレンジし、レパー



各パートを聞きながらハーモニーを作り出していく

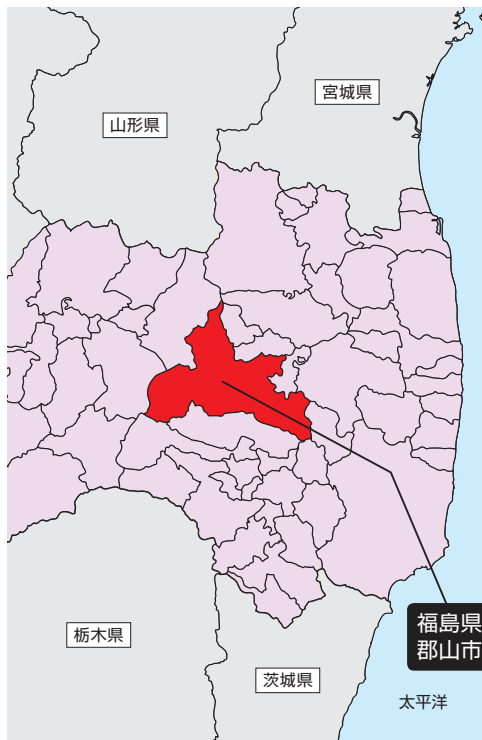
DATA

大槌童謡を歌う会

TEL 019-681-9575 (会長 阿部恵子さん)

童謡を歌うことを通じて、社会貢献、仲間づくり、健康増進を進める。震災後は、支援イベントや地域の行事に積極的に参加し、支援の感謝を伝えたり、仲間づくりを推進している。

トリートの幅を広げている。歌の仲間も広がりを見せており、震災後には新規メンバーも5人加わった。さらに、キッズコーラスの子どもたちや、全国のコーラスグループとの共演の機会も多くなり、歌を通じてたくさんの人たちとつながり、ハーモニーをつくりだしている。これからも、童謡を歌う会は、地域を元気づける歌声で、「心のふるさと」をさらに豊かにしていくことだろう。



自宅の離れを改装した「カラオケルーム」。週に一度、近所の歌仲間が集まる

20年以上続く「自宅カラオケサロン」

◎熊田留男・ミサヲさん夫妻（福島県郡山市）

ポイント

- 楽しさを周囲に「おすそ分け」することで仲間づくりが進む
- 外部から見えにくい「自宅サロン」も、住民同士の支え合いを生み出す重要な基盤

歌をこよなく愛する夫婦が、今から20年あまり前、自宅の離れを改装してカラオケルームをつくった。

「カラオケが好きな人は家に来て歌って」と呼びかけると、徐々に人が集まるようになり、近隣住民のカラオケサロンとなった。

「歌は元気の秘けつ」

このカラオケサロンを開いているのは、福島県郡山市田村町桜ヶ丘地区に住む熊田留男さん（88歳）と妻のミサヲさん（84歳）。

「歌は私たちの元気の秘けつ」と熊田さん。ミサヲさんは、「私も夫も、歌はもちろん、人を集めて楽しむのが大好き」と話す。

夫妻とも、カラオケのほかグラウンド・ゴルフなどのスポーツをたしなむ。最近はず腰に痛みがあり、スポーツも外出も以前ほど気軽にはできないが、カラオケで仲間とつながり続け、元気を保つ。「歌っていると、体の痛みなんか忘れてしまう。嫌なことも全部吹き飛ばしちゃうよ」（熊田さん）。

歌仲間の1人、86歳の男

性も、「声高らかに歌うのは実に健康にいいと思う。ここがなかったら、今頃私もこんなに元気になっていたらなかった」と語る。

カラオケルームの設置は1990年頃。自宅隣接の車庫の2階、かつてミサヲさんの縫製仕事の作業場だった10畳ほどのスペースを改装した。防音を施し、音響機器を入れ、10人ほどがゆったり座れるソファを置いた。天井のミラーボールと鏡張りの壁面が雰囲気盛り上げる。

カラオケサロンは毎週木曜の午後1時から3時半まで。夫妻も含めて5〜8人ほどが集まる。持ち寄ったお菓子や飲み物を味わいつつ、順番にマイクを握る。歌の合間のおしゃべりもまた、楽しい。

サロンが始まった当時60歳前後だった夫妻と仲間たちは、今や全員70〜80歳代。子どもが独立して夫婦2人だけになったり、伴侶を亡くしてひとり暮らしになった人もいる。

仲間同士の支え合いも

仲間同士、電話でもしば



熊田 留男さん・ミサヲさん夫妻

「カラオケは私たちの元気の秘けつ。

歌はもちろん、人を集めて楽しむのが大好き」

しば連絡を取り合い、用事があってサロンに参加できないときなどは、事前にその旨誰かに伝えておく。また、何か困りごとを抱えた際、仲間が相談相手になることは珍しくない。

自宅ですり暮らしをしている78歳の女性は、庭木の手入れなど力仕事が必要になった場合、カラオケ仲間と相談する。仲間たちは、直接手助けできなくても、友人・知人のつてをたどって手伝える人を探す。「困ったことがあると仲間が助けてくれる。それに熊田さんは、『さびしかったらいつでもおいで』と言ってくれて。本当にありがたい」。

カラオケ以外の近所づきあいも活発だ。煮物などを多めにつくっておすそ分けし、ついでにお茶飲みもする。老人クラブに役員として加わってもある。

娘夫婦と暮らす83歳の女性は、スポーツ民謡（民謡や歌謡曲に振り付けをして踊るレクリエーションの一種）のサークルに所属。地区のイベントなどで踊りを披露し、喝采を浴びる。この女性もまた、隣近所とよ



毎月第4日曜の午後、地区集会所で開かれる「カラオケ愛好者の集い」。機材は熊田さん夫妻が町内会に寄贈したもの

くお茶飲みをしている。「気が向いたときに『お茶飲みも』とか言ってお互いの家を行き来します」。

サロンは小さくまで

熊田さん宅に集う人たちは、『孤立』とは無縁の生活だが、地区全体としては、住民同士のつながりは「あまり強くない」（地元関係者）と言われる。1970年代に造成された住宅団地で、新興住宅地にしばしば指摘される住民関係の薄さが、同地区でも見られるという。そのうえ、分譲開始当初に移り住んだ人たちの高齢化が進んでいる。

民生・児童委員の柴田和

貴さん（71歳）は、「自宅で孤独な生活を送っている高齢者が目立つようになってきた。足腰が弱くなり、ひきこもりがちになって、さらに体が弱る悪循環が心配」と打ち明ける。

柴田さんは、町内会や地区社会福祉協議会の協力を得、住民ボランティア組織も結成して2014年6月、地区集会所での「いきいきサロン」をスタートさせた。以来、毎月第4日曜の午前11時から午後1時まで、70歳以上の住民は誰でも参加できるサロンを開いている。毎回約30人が喫茶や昼食、ラジオ体操、ゲーム、合唱、レクリエーションなどを楽しむ。

熊田さん夫妻とカラオケ仲間も、いきいきサロンに参加している。このサロンの終了後、同じ会場で「カラオケ愛好者の集い」が開かれる。これは、熊田さんが町内会にカラオケ設備を寄贈したことがきっかけで始まった。

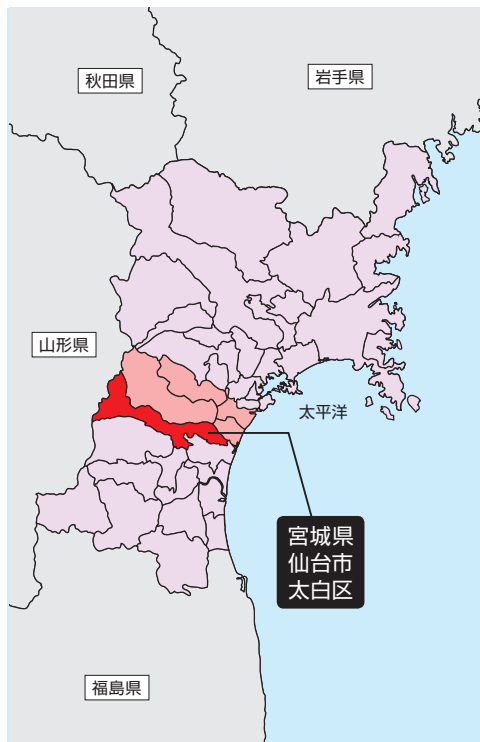
いきいきサロンやカラオケ愛好者の集いに参加する地区住民、これらを運営する民生・児童委員と住民ボ

ランティア、それに熊田さん宅に集うカラオケ仲間たちの新たな交流が進む。集会所での大規模なサロンと、ちょっとしたお茶飲みや熊田さん宅でのカラオケといった「自宅サロン」の組み合わせは、住民同士のつながりを拡げつつ、きめ細かな見守りや支え合いを生み出す基盤になる。「自宅サロン」は外部からは見えにくいですが、地域包括ケアの推進要素としてきちんと評価していきたい。木

DATA

郡山市田村町桜ヶ丘地区

JR郡山駅から南南東に約5kmの丘陵地にある住宅団地で、1971年から97年にかけて開発・造成された。開発面積は約26ヘクタール。2016年1月1日時点で1428人、548世帯が暮らす。高齢化率は30.3%で、市全体の23.8%を6ポイントほど上回る。団地内に公共交通はなく、路線バスは団地の外を通る国道に出ないと利用できない。日用品や食品を購入できる商業施設もなく、交通・買いもの弱者対策、高齢者の孤立対策が地域課題として挙げられる。



歌い手も聞き手も一緒に盛り上がる

カラオケに集い、育む絆

◎鹿野カラオケ愛好会絆（仙台市太白区）

ポイント

●災害公営住宅と周辺地域の住民が、歌を通じて親睦を深めている

宮城県仙台市太白区にある鹿野復興公営住宅の集会所で、同住宅の入居者と近所に住む地域住民が、月2回、一緒にカラオケを楽しむ集いがある。団体名は「鹿野カラオケ愛好会絆」。同会は2016年4月にできたばかり。「歌うことでストレスを解消したり、参加者同士が交流したり、カラオケをとおして、楽しく過ごす機会をつくりたい」という思いで設立した。会員は約20人。今も少しずつ増えている。

カラオケは気楽に楽しめる

活動場所となる集会所の大広間には、テーブルと椅子が置かれ、各席にペットボトルのお茶やお菓子、歌いたい楽曲を書いておくカードが配られる。カラオケセットに登録されている曲の一覧表をメンバー同士で貸し合いながら、何を歌おうか考える。カードには、歌いたいと思う曲を2曲まで書くことができ、申し込み者、曲名、曲番号、歌手名を記入して、入力役のメンバーに手渡す。カラオケセットに曲番号が入力されて、次々に曲が流れる。

演歌や民謡など、思いおもいに歌う。基本的にはひとりずつ歌うが、2人ほどでマイクを1本ずつ持って歌う場面も見られた。マイクを持つていない人も、一緒に口ずさんだりする。歌っている人の隣や後ろの席の人が、歌い方についてアドバイスしてくれることもある。

思ったように上手に歌うことができなかったのか、「だめだ、声が出ないわ」「おはずかしい」などと、歌い手から悔しそうな言葉がこぼれることもあるが、それでも笑顔のまま、楽しそうな雰囲気は変わらない。

歌の練習をする教室とは違って、自分たちが知っている歌、好きな歌など、歌いたいものを歌うことができることもカラオケの魅力だという。歌いたいときに曲を頼み、歌いたいように歌う。自分が歌うよりも、ほかの人が歌うのを聞いているほうが楽しい人など、最初から参加して、1曲も歌わなかったかまわらない。メンバー同士、歌うように勧めることはあるが、無理に歌わせようとはしない。自由に気楽な集まりが、居心地の良

さにつながっている。

2時間ほどで約30曲が流れた。「この昔の歌、わかる？」
「わからないわ」という会話も聞こえるように、メンバー全員が知っている曲ばかり歌われるとは限らない。それは、参加している年齢層が幅広い証でもある。

歌で心も体もすっきり

閉会後のメンバーの表情も晴れやかだ。

「よかった、よかった！肩の力が抜けた！2年半寿命が延びた！」「お腹から声を出すのが気持ちいい」「こういうものがないと、なかなかみんなと顔を合わせることがないから、この会がないとさびしいね」

メンバーは、皆カラオケに参加できる機会を喜んでる。

同住宅の入居者で、鹿野町内会の役員や老寿会（地域の老人クラブ）の会長も務め、同住宅の世話人のような役割を担う那須忠雄さんは、「参加することで、皆さんに友だちが増えてきた。あれ、あの人とこの人って、友だちになったんだ！」と驚く

ことでもあります」と話す。

近くに住んでいても、もともと面識のなかった人も少なくない。顔を合わせるきっかけになり、それまでの開催がたった3回でも、交流し、親しくなれる。

愛好会を開催する日、那須さんたちは、早めに会場に向かい、13時頃には会場の準備がおおよそでき上がる。ほかの参加メンバーが集まるまで、曲をかけながら音響の調節をしたり、早く来た人同士で世間話をしたりする。

愛好会のことを知らなかったある男性は、集会所に人が集まっている様子を見て興味をもち、皆でカラオケをする集まりだと聞いて、その場で入会した。

愛好会会長の高階勝子さんと那須さんは、「部屋にこもりがちの人が、外に出るきっかけにしたい。今後は、今の倍くらいの人数に参加してもらいたい」と考えている。

会の最後は、全員で「ボケない小唄」を一緒に歌う。まだ始まったばかりの活動だが、メンバーの歌声は今後ますます多くの人を呼び込み、広く絆を強めていくだろう。

清

岩手県立大学 社会福祉学部 准教授

齋藤 昭彦(さいとう・あきひこ)さん

1979年に岩手県入居。以後、胆沢町（現奥州市胆沢区）や一関市において市町の保健福祉行政職を務めるなどしながら、36年間、県内の福祉行政に携わる。2008年度、14年度の「岩手県高齢者福祉計画・介護保険事業支援計画」や、13年度の「岩手県地域福祉支援計画」の策定に携わり、岩手県保健福祉部参事兼長寿社会課総括課長を務めたあと、15年より現職。専門は自治体福祉行政論など。



専門家に聞く地域づくりのヒント

「歌の力」が人々のつながりと地域をつくる

うれしい時や、気落ちした時に、10歳代、20歳代に歌った歌を口ずさむことがあります。歌は、過去の時代や時間を思い出させ、蘇らせてくれます。心を優しくしたり、奮い立たせたりします。一人で歌う歌、大勢で歌う歌。歌には不思議な力があるのだと思います。

大槌童謡を歌う会

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた大槌町の人たちが、歌で、避難所や仮設住宅での困難を乗り越え、以前の仲間とのつながりを取り戻していきます。そして、地域を元気づけるために、支援をしてくれた人々へ感謝と元気を伝えるために、さらに、歌い続けています。

会長の阿部さんは「みんなの助け合いが長続きの秘けつ」として、歌とともに「世間話など話題が絶えない」ことを挙げています。すべての地域活動に共通する「秘けつ」かもしれません。「協調性」と「柔軟性」、そして「楽しさ」。これらは、「美しいハーモニーづくり」にも「支え合いの地域づくり」にも通ずることでしょう。

大槌町の復興の槌音と「歌う会」の歌声が、すばらしいハーモニーとなりますように。

熊田夫妻の自宅カラオケサロン

中高年現役・元サラリーマン夫婦アンケートの「夫婦2人の暮らしを充実させるために行っていること」では、夫婦でともに行うこととして、4位にやっと「一緒にご飯を食べる」が登

場します。定年退職した夫の「準備しておけばよかったこと」の3位が「新しい趣味をつくる」です。

20年以上熊田さん夫妻が開放する「自宅カラオケサロン」は、中高年夫婦や趣味のない男性の助けに、伴侶を亡くした人の「支えと慰めの場」となってきたことでしょう。

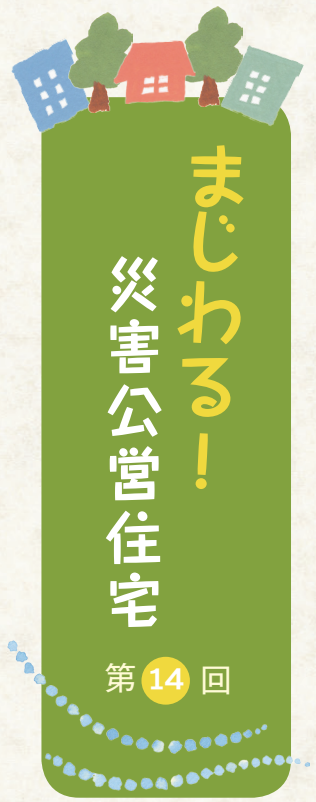
熊田さん夫妻の自宅は、「歌う場」から「困りごと相談や健康づくりの場」、地域の多様な「生きがいがづくりと見守り・支え合いの場」へと発展しています。地域包括ケアで重要とされる地域活動は、地域にいまあるものの発見・見直しから始まると思います。

鹿野カラオケ愛好会絆

被災者の方々の仮設住宅から復興公営住宅への転居が進んでいますが、転居にともなう負担や精神的ストレスは、とくに、高齢者にはかなりのものがあるでしょう。

同じ被災者であるからわかり合える、でも、いつも同じ愚痴や不安を話していても……。鹿野カラオケ愛好会絆は、地域と共有する災害復興公営住宅の集会所で、幅広い年代の地域の人たちとともに開催されています。

「いつまでも被災者扱いして欲しくない。でも、被災者であることを忘れないで欲しい」という被災者の複雑な思いや消えることのない悲しみ、明日への希望を、上手な人も下手な人も「歌に託せる場」は、被災の有無や程度を越えて、地域全体の「共有財産」になっていくことでしょう。



みんなの思いが、 形になる場所

玉浦西交流会
(宮城県岩沼市)



「みんな笑顔で帰れるように」という思いから、毎回会の最後には、元気に「ガッツ！」と掛け声をかけて終わるのがお約束になっている。



2014年4月から防災集団移転を始めた岩沼市玉浦西地区では、災害公営住宅を含めて約370戸が建ち、1000人以上の住民が暮らしている。同地区では、今年1月から岩沼市スマイルサポートセンター（通称・スマサポ）のスタッフが中心となり、『玉浦西交流会』を開催している。住民が抱えているまちづくりへの想いや、日々の生活のなかから生まれる要望などを、住民同士で共有してもらいたい

という思いからだ。

会は月に1回開催され、5月25日に5回目が開かれた。開始時間は午前10時だが、時間前から会場である玉浦西地区中集会所に住民が続々と集まってくる。受付を済ませて席に着くと、時間までのおしゃべりに花が咲く。

会では毎回まちづくりや生活に関するテーマを決めて、それについて話し合ったり、発表をしたりしている。これまで「楽しい集まりとはどんなものか?」「集まりをしてみたいの悩みは?」などのテーマを設けてきたが、今回は「皆さんが取り組んでいる活動の紹介」がテーマだ。玉浦西やその近隣地区で自主活動を行っている住民が、実演やスライドを交えながら、自分たちの活動について紹介する。茶話会、ダーツ、脳トレ、パークゴルフなど、グループによって内容もさまざまだ。紹介を聞いた住民からは、さかんに質問が飛ぶ。「いつやっているの?」「私も参加できる?」などの意欲的な質問に、発表者も「今度、掲示板にお



自主活動で脳トレを行っている住民の発表。「皆さんも一緒に」という声に促され、みんなで実践する。

知らせを貼るから、見てね」「誰でも歓迎だよ」と笑顔で応じる。また、活動するにあたって必要なものが足りない、という求めがあれば、「私の家に余っているものがあるから、使つてよ」と、すぐに応える声がある。活発に飛び交う声に、自分たちのまちを、自分たちの力でつくり上げていこうという意思と意欲が感じられる。

以前の会では、参加者の何気ない一言から、サークルができた、イベントが開催されたりしたこともあったという。「何かをしたいと思つても、個人で行動を起こすのは難しい。けれどここに来れば、同じ思いでいる人や、協力してくれる人がいるかもしれない。そんなふうに思っていることが形になる場になればいい」とスマサポの復興支援・地方創生コーディネーターの青木秀利さん。「それに、この住民の皆さんはとても意欲的」と話すとおり、参加者の顔は皆、生きいきと眩しい。

会の最後には、参加者全員で輪になり「ガッツ!」という掛け声をかけて閉会する。帰りたくをして帰路につきながらも、あれこれと相談や提案が尽きない。新しいまちの歩みは、始まったばかりだ。吉

平成28年度 宮城県サポートセンター支援事務所の活動

東日本大震災後、被災市町村では、被災者の生活を支援するために個別訪問や相談・調整、地域支援を行う「支援員」を多様な形で配置し、現在も県内で約600人が活動しています。

宮城県では、支援員の活動をバックアップするために、2011年9月に「宮城県サポートセンター支援事務所」を設置（宮城県社会福祉士会が運営受託）。災害公営住宅などへの本格的な転居期を迎え、今年度も協力団体と協働しながら、地域の福祉力を基盤とする福祉コミュニティの形成をめざして取り組みます。

平成28年度重点目標

災害公営住宅移行期、定着期におけるサポートセンター機能の
継続的・拡充的な運用を目指すとともに、
当支援事務所の協力団体と連携、協働してバックアップ機能の充実を図る。

- ① 災害公営住宅移行期、定着期における福祉コミュニティ形成支援の促進を図る。
- ② 被災住民（仮設・みなし・広域・在宅）の生活再建と自立に向けた支援の継続を図る。
- ③ 被災地における地域福祉、地域包括ケアの推進に必要な人材育成をすすめていく。
- ④ 「被災地サポートセンター」から「地域支え合いサポートセンター（仮称）」へ質的転換を目指し、地域の福祉力の向上をもって見守りネットワーク構築等、住民主体の活動の組織化を図る。



長期目標：地域の福祉力を基盤とする福祉コミュニティ形成

平成28年 宮城県サポートセンター支援事務所事業計画

(1) 被災者支援従事者研修

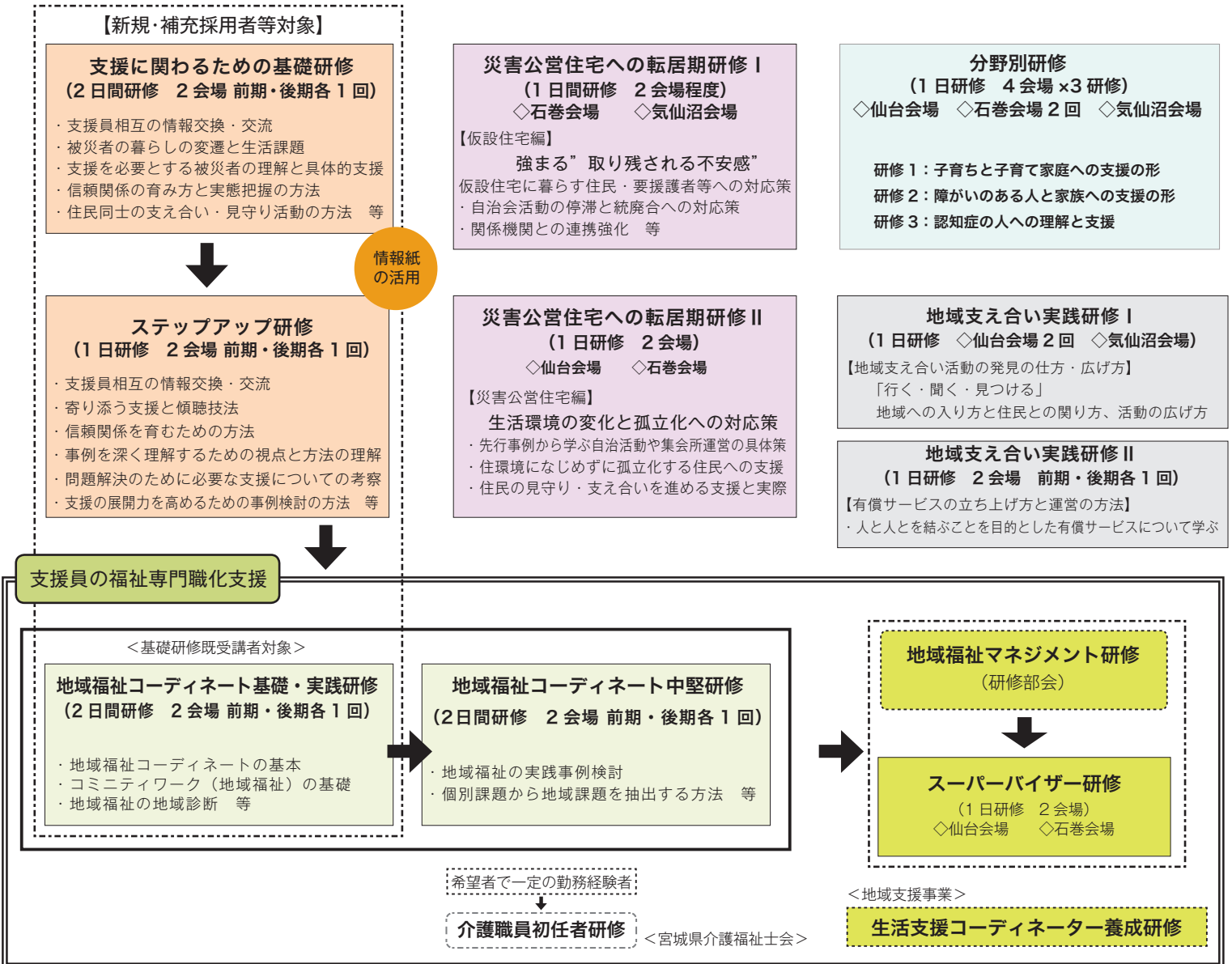
「地域の福祉力」の育成を目指す

- ① 従事者研修（継続・図参照）
- ② 地域福祉コーディネーター基礎・実践・中堅研修（継続・図参照）
- ③ 地域福祉マネジメント研究会（継続）
 - ・地域福祉推進に向けた基盤整備に係る研究を行う。
 - ・地域福祉コーディネーター研修の体系化に向けた提言を行う。
 - ・サポートセンターへの評価を行う。

平成28年度 宮城県被災者支援従事者研修 研修体系

宮城県・宮城県サポートセンター支援事務所

～被災地における地域包括ケア基盤研修～



(2) 専門職（家）派遣

- ①サポートセンター・地域の支援者等と協働した派遣
- ②「サポ弁」としての弁護士と協働した派遣（アウトリーチ）
- ③移行期に向けた計画策定等に向けた専門的な助言
- ④法テラスへの専門職派遣
- ⑤心のケアセンター等との連携した派遣
- ⑥NPO等との連携

(3) アドバイザー派遣

浜上章氏（兵庫県／社会福祉士）、山下隆二氏（三重県／社会福祉士）の2名をアドバイザーとして任命し、専門性を活かした活動と、コーディネーターのヒアリングとリンクした各市町に応じた支援活動を目指す。

派遣期間：1週間／1か月（年間約10回）

- ①災害公営住宅移行支援
- ②地域福祉の担い手の養成や支援に係る検討会、調査研究の委員としての活動

(4) ヒアリング事業

コーディネーターを中心に下記視点を大切にしながらヒアリングを行い、アドバイザー、専門職等との連携で市町支援体制のバックアップを行う。

- ①サポートセンター従事者への継続したバックアップ
- ②各市町における支援者のプラットフォーム構築
- ③介護保険改正、生活困窮者自立支援等の新制度と被災市町における動向の把握

(5) 広域避難者支援

県内外の広域避難者支援について一層の充実を目指す。（宮城県震災復興推進課との連携）

- ①県東京・大阪事務所、全国数か所の支援拠点との協働相談会、交流会等と連携した取り組みを行う。
- ②受入県、市町等の協力を得て支援を推進できるよう、体制構築を目指す。

(6) 地域の福祉力の醸成に向けた地域福祉コーディネーター養成と登用

- ・ 研修計画と重複
- ・ 宮城版 地域福祉コーディネーター（CSC）の養成と登用
- ・ 平時における地域のサポート拠点のあり方の検討とともに具現化を目指す

(7) 連絡会議等の開催および参加

各協力団体との情報共有を行い、バックアップ機能充実に向けて連携を図る。

(8) 宮城方式の評価

ヒアリング事業の一環で、サポートセンター事業、従事者へのヒアリングを実施し、その成果等を検証していく。また、平時におけるサポートセンター機能のあり方を見据えた評価を行う。

DATA

〒961-0592
福島県岩瀬郡天栄村
大字下松本字原畑78
天栄米栽培研究会内

田んぼのパートナー制度事務局
TEL 0248-82-2117
FAX 0248-82-2718

28回目

市民リレー

東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

つながりに支えられて、安全・安心でおいしい米づくり

◎天栄米栽培研究会内 田んぼのパートナー制度事務局（福島県天栄村）



五月晴れの下、今年も田植え体験が行われた。慣れない泥に足をとられながらも、ひとつずつ丁寧に植えていく。

田植え機での実演のあとの質問コーナーでは参加者から研究会メンバーに盛んに質問が飛んだ。

田植えを終えた交流会の会場となる田んぼ。これから草取り・稲刈りの各交流会が行われる予定だ。

福島県天栄村は、綺麗な水と肥沃な土地に恵まれた、稲作が盛んな村だ。村の名前を冠した「天栄米」は、ブランド米として知られ、毎年11月に行われる『米・食味分析鑑定コンクール国際大会』で8年連続金賞を受賞するほどだ。

震災後、村は福島第一原子力発電所の事故による放射性物質汚染と風評被害に苦しめられてきた。

「天栄米」をつくる「天栄米栽培研究会」では、早期から各研究機関や大学などと連携して対策に取り組んでおり、これまで一度も米からの放射性物質は検出されていない。しかし放射性物質汚染対策はコストがかかるため、自己投資のみで続けていくのは生産者に大きな負担がかかる。そんな中、頑張る農家と消費者を結びたいという思いで企画されたのが、5年前から実施している「田んぼのパートナー制度」だ。制度を通じて一口15000円の支援金を消費者から集り、その返礼品としてその年の新米30kgを送る仕組みだ。寄せられた支援金は、汚染対策をはじめとした安全でおいしい米づく

りのために役立てられる。また、パートナーの輪が広がることで、米づくりに対する姿勢に理解を示す人が増え、風評被害の払しょくにも一役買っている。

生産の現場を消費者に知ってもらうために震災前に始まった『顔のみえる米づくり』という田んぼでの交流会は、今年で7回目の開催となった。研究会が管理する田んぼに、パートナーをはじめ、つながりのある方を招き、田植え・草取り・稲刈りなどの農業体験をしよう。

今年の田植えは3回に分かれ、計87人の参加があった。参加者のほとんどが東京をはじめとした関東圏在住。交流会をきっかけに天栄村に来るようになったという人も多く、村の交流人口の増加にもつながっている。交流会は毎回同じ田んぼで行われるため、参加者は「自分の田んぼのようで愛着が湧く」と話し、リピーターも多い。

消費者とのつながりに支えられながら、天栄米栽培研究会は今年度のコンクールで、前人未踏の9年連続金賞受賞を目指す。吉



支え合い
S-1
グランプリ
第3回いがす大賞

東日本大震災・私の地域の元気興し

I.A

被災地の優れた住民支え合い活動を掘り起し、称え、広く発信するS-1グランプリ。2016年2月20日(土)に仙台市内で開催された第3回の応募者、入賞者のアイデアと実践を、連載形式で紹介しします。



第3回いがす大賞にて、誰でも気軽に参加できる取り組みを称える「のさる賞」を受賞した、宮城県石巻市の「寄合処とやけの花」は、介護保険外の通所介護サービスを設けながら、利用者や地域の人たちの交流の機会を創出する。同市の「株式会社とやけの森」が、空き家を借りて2015年4月から運営している。

株式会社とやけの森は、もともとデイサービスとやけの森、デイサービスとやけの空、介護相談所とやけの虹という事業所も運営している。介護保険が改正され、代表取締役の日野宏敏さんたちが、介護保険サービスの頼らない地域の力の必要性を一層深く考えるようになり、とやけの花を開設した。

週3回開所していて、介護の利用者は、四季折々の昔ながらの作業をする。地域住民とも一緒に、畑仕事・木工・竹細工・農産物加工など、昔の暮らしぶりに近い体験をできる。作業は、地域の高齢者や主婦なども務め、スタッフも教えてもらいながら一緒に行く。高齢者だけでなく、子どもや若者も楽しく活動できるように心がけている。

目の不自由な人と、ものづくり方をすぐに忘れてしまう人が一緒にひとつの作品をつくるなど、それぞれが自分にできることを楽しむ。いろいろな人がまじわり、ふれあえば、さまざまな形の支え合い



畑に出て、馴染みのある農作業を仲間と楽しむ

も生まれる。医療や介護の勉強会を開いたり、かつては一般的だった自家製味噌づくりを広めなおしたりしている。いがす大賞の会場では、普段の活動のように、当日の朝つくった甘酒をふるまい、審査委員や観客から喜ばれた。

人は歳を重ねていくなかで、身の回りの家事など、できないことも増えてくる。それでも、昔に培われた経験や知識は、若い人もうらやむような貴重なもの。日野さんは、「誰もが自分の価値を感じ、もう一花咲かせることのできる寄合処」を目指している。清

● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年 広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、『見守り活動』から「見守られ活動」へ(CLC発行)、『生活支援コーディネーターと協議体』(共同執筆、CLC発行)。

ゴミ投げ活動と地域包括ケア

ご近所福祉クリエイション主宰 酒井保

「地域包括ケアだとかさ。私には難しくわかんないけど、協力してくれて言われると断れない性分だね。それが『災い』しちゃって。まあ、役所からしてみれば、『幸い』しちゃってということになるのかしら」

宮城県塩釜市清水沢中部地区で民生委員と健康推進員という大役を担いながら、ボランティアアグループ・清水沢中部アカシア会の事務局を務める今野紀美子さん(75歳)は、そう言いながら自身の頭をポンと叩き、舌を出して笑顔をつくった。

アカシア会は、塩釜市体育館において「脳げんき教室」と「ダンス教室」をそれぞれ毎月1回運営しており、今野さんがその調整事務を行っている。それらは塩釜市がすすめる地域包括ケアや介護予防という課題を受けての「住民互助」による取り組みである。

「体育館に集まる地域の皆さんの笑顔を見ると元気が湧いてくるの」という今野さんは、ある日、いつも笑顔を見せてくれるお年寄りの暗い表情が気になり、「どうしたの?」と問いかけたところ、次のような困りごとを打ち明けられたという。

「ヘルパーさんにゴミ投げ(ゴミ捨て)をお願いしたら、業

務の都合でゴミの日に訪問することはできない」と断られて。どうしたものか」と。ヘルパーの都合で必要なサービスが受けられないとはどういうことか? そのとき今野さんは、「地域包括ケアってなんなの? 制度ってなに!？」と憤った。

「ゴミ投げに困っているのは、この方だけではないはず」と思った今野さんは、早速、町内会長さんに相談。「そんなことがあるのなら、都合によつてはゴミの日の前日に出してもよしとしよう」というご提案をいただくことができた。しかし、そのことを町内に周知し、即刻理解を求めるのは難しいだろうと判断した今野さんは、アカシア会の仲間呼びかけ、ゴミ投げに困っている高齢者のための「ゴミ投げ(ゴミ出しボランティア



今野紀美子さん

ア)活動」を始めることにした。「ある方のところでは、『朝方、トイレに起きたとき、ついでに勝手口の鍵を開けておいてね』とお願ひしているの。ゴミを投げるだけだからね。本人には部屋で寝てもらうのよ。お互いに気をつかうのつてイヤでしょ。でも、誰が家に入ってゴミを投げてくれたのがわかんないと具合も悪いような気がしてさ。冷蔵庫に連絡帳をぶら下げたの。それに伝言を書くのよ。〇月△日今野です。お昼に顔を見に来るからね」とか、

〇〇です。夕方にお煮しめ持ってくるからね」とか。遠くに離れて暮らす娘さんが様子伺いに来られた時にそれを読まれて、『母がいつもお世話になってます』つて、時々お菓子をくださるようになってさ。そのお菓子をみんなでいただきながらお喋り会をしてんのよ。もちろん、このお宅でご本人も交えてね」と、ゴミ投げ活動(見守りと言わない見守り活動)は、お喋り会(サロンと言わないサロン活動)へと発展していった。そんなアカシア会、仲間の年齢も70歳後半から80歳前半と高齢化を迎えている。「活動を始めた頃は、65歳から70歳前半(普通は、この年齢を『高齢

という)だった仲間も歳をとってしまつて。先日も、『私もいい歳だし、自分自身のゴミ投げができなくなつたら、どうしようかしら』つて言つた仲間がいてね。『なに言つてんのよ。できなくなつたら、できる者がやつてあげるから大丈夫だよ!』つて言つたのよ。そしたら、みんな『そうだ! そうだ!』つて、笑つちゃつて。私たちつて、もしかしたら自分たちの安心のために活動してるのかもしれないわね』そう言つて、頭をポンと叩いて笑つて見せる今野さんの口からは、活動にかかる愚痴の一切が出てこない。その今野さん、なんと「地域で往生したい」というひとり暮らしのお年寄りの看取りを支援した経験もあるという。今野さんは頭を叩いた手を拳に変えて、呟くようにこう言つた。

「活動しててさ、制度が万全じゃないつてことがわかつたの。どうしても隙間ができちゃうの。そこを埋めるためには、やっぱり地域での支え合いが必要なのよ。地域包括ケアなんて難しくよくわかんなくなつたけどさ。近頃思うのよ。それつてたぶん、今私たちがやつていることなのかなあつて」



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

伊達な親爺の話

最近の自分の言動は、つくづく「〇〇親爺」そのものになっていると実感します。いまさら、周りの皆さんに気を遣うのは面倒なのです。偏屈、頑固、独りよがり磨きをかける今日この頃です。でも、どこか中途半端な親爺ですが…。

私の大学からの友人（気持ち的には先輩）に、伊達な親爺がいます。その方が、長年ともに活動していたNPOの役職を退かれました。正直、取り残された感が強いのですが、私の勝手な動きを受け入れてくれながら、的確なマネジメントを為されたことに感謝以外の言葉はありません。慰留すべきと思いましたが、自らの決断を覆す人ではないので。

この伊達な親爺は、仙台の伝統・文化を伝承していく役割を担っている人ですが、古さを基本持ち合わせていない、モダニズムを体現している「〇〇親爺」と言える人です。この人の後ろ姿を追っかけている私、でも絶対に先を越すことのできない存在です。厄介な親爺ではありますが、欠かせない存在であっただけに寂しい。NPOの事務所にこの親爺がいないのであれば、一段と足が遠のく気がします。

でも、息子がこの伊達な親爺の薫陶を得て、伝統文化に触れる機会を持ち続けているので、私は伊達な親爺にはなれませんでした。息子にはその可能性を期待しています。

ところで、伊達な親爺とは？私的には、仙台をはじめとしたこの地で、地元の伝統・文化を、市井の人たちのもつ経験知で、IT中心の技能知優先の軽薄さに敢然として立ち向かっている存在です。藤沢周平や葉室麟の時代小説に出てくる人々。男性だけではなく、伊達なおばちゃんも当然含まれます。ただ、伊達な親爺と同様のネーミングが女性の場合になかなかないので、どなたか適当なネーミングを考えてください！当事務所あてにご一報ください。採用の際は、この紙面で発表します（ご褒美に粗品贈呈？）。

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章

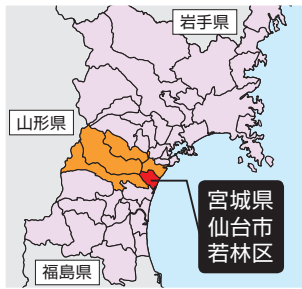


“住民ニーズ発”から住民参加・住民主体の地域活動につなぐ

住民のなにに気ない“つぶやき”や“事象”から地域福祉活動へつなげることを前号で書きました。では、どうやってつぶやきや事象を地域福祉活動につなげていけばよいのでしょうか？

つぶやきのなかには、その人の思いが込められています。まず、そのつぶやいた人の思いや状況について丁寧に話を聞くことから始めてください。そして、ほかにも似たような人がいないか？いればその人たちにも声をかけて、“集い・話し合える場”を調整します。話し合いの場でたいせつなことは、支援者側の思いや計画が先行するのではなく、参加者が自由に思いを出し合える雰囲気や場の配慮です。何回かそういう場をもって思いを引き出し、そのなかで「何かをしたい」「こうあったらいいな」という声が出てくれば、その願いの実現に寄り添ってサポートする。そして、「皆さんでできることはなんですか？」「Aさん、Bさんにできること、したいことはなんですか？」と投げかける…。そこが、参加者である住民のもつ力を引き出し、住民主体で進めていくことができるかどうかの別れ道になります。

人は、自分の存在を尊重されると嬉しいものです。自分の意見が尊重されること、活動に活かされることで、「単なる参加者」から“参画者”になり得ます。参画者になることで、活動への関わりや度合いが変化し、責任意識も生まれてきます。「カフェ」や「お茶会」、「子育てサロン」や「男の集い」でも進め方は同じだと思います。支援者が焦って「早くなんとかしてあげなければ～」「住民の人は、こう言っているが、本当はこうしたほうがいいのにな～」と思うこともあるでしょうが、支援者が手を出し過ぎたり、意見を押し付けることは禁物です。たとえ最初は大変でも、住民の意見によって進めることが、「自分たちの活動」として醸成されていくことにつながります。支援者側の主導、思いが強すぎる活動は、スムーズに立ち上がったように見えて実は、住民には受け身の活動になりがちです。活動を住民参加・住民主体の活動にもっていくためには、住民の思いや力をうまく、丁寧に引き出せるかどうかにかかっていると思います。



唐草の和雑貨が人気！ 商品の魅力で経済的自立をめざす

手づくりくらぶ **Arabesque**
(宮城県仙台市若林区)

仙台市若林区の卸町5丁目仮設住宅のクラブ活動から派生した「手づくりくらぶ Arabesque」は、和雑貨を制作する団体だ。メンバーは30〜50歳の女性7人。縫裁会社に勤めた経験をもつ代表の齋藤志津子さんの指導のもと、独自の型紙でつくる唐草模様（アラベスク）のトートバックやガマぐちはモダンで、人気がある。今年5月には、品質を評価した企業の協力で、隣の山形市にある商業施設「セブンプラザ」3階に、常設店舗を構えることができた。また、8月の仙台七夕期間中に、エスパル仙台への出店が決定。これまで助成金は一切受けたことがないという。「商品のレベルアップを図りながら継続的に販売することで、メンバーの経済的な自立につなげたい」と齋藤さんは話す。

山元町で被災し卸町5丁目仮設住宅に入居した齋藤さんは、町内で役員を務める一方、支援物資でいただいた集会所のミシン1台で、小物づくりをするようになった。それを見て「私にもつくり方を教えて」と人が集まるようになり、2012年3月に「手づくりくらぶ」を発足。中古ミシンを集めて活動するうちに、「作品を売ってみたいね」という声が始まり、若林区の陸奥国分寺薬師堂で毎月開かれる「手づくり市」に出店。出店料を支払うことは痛手だったが、つくったものが売れる喜びは大きかった。それ以降、仮設住宅に支援に来る人たちなどから声をかけられ、イベントや首都圏のデパートなどにも出店。ミシンに触るのが初めてだった人もいるが、いまではメンバーが自ら検品して、品質が安定するようになった。

メンバーの多くが災害公営住宅などに引っ越した昨年、団体名を「Arabesque」に改名。震災によって心に傷を抱えたメンバーも、Arabesqueを通じて自分の役割や社会的つながりをもつことができています。なにより、自分で働いて得たお金はうれしい。5月には、齋藤さんがメンバーへの慰労として日帰り温泉に誘い、初めての「遠足」を楽しんだ。「メンバーの気持ち、心の復興をたいせつにしながらか活動していきなさい」と齋藤さんは前を向く。

小



唐草のガマぐちは850円〜。出店依頼・ご注文は、齋藤さんまで (TEL080-3326-8753)

でいただいた集会所のミシン1台で、小物づくりをするようになった。それを見て「私にもつくり方を教えて」と人が集まるようになり、2012年3月に「手づくりくらぶ」を発足。中古ミシンを集めて活動するうちに、「作品を売ってみたいね」という声が始まり、若林区の陸奥国分寺薬師堂で毎月開かれる「手づくり市」に出店。出店料を支払うことは痛手だったが、つくったものが売れる喜びは大きかった。それ以降、仮設住宅に支援に来る人たちなどから声をかけられ、イベントや首都圏のデパートなどにも出店。ミシンに触るのが初めてだった人もいるが、いまではメンバーが自ら検品して、品質が安定するようになった。

購読者を募集しています！

【月刊 地域支え合い情報】を年間購読しませんか？

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：02260-9-46303
加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み を記入してください。

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

普段なにげなく行っているお茶っご会ですが、この情報紙を読んで、地域づくりの一端を担っていることを学びました。お茶っご会で出た雑談を膨らまし、43号にある多賀城市の活動のように多世代で交流し、しかも地域住民が参加してくれるような楽しいコミュニティを目指します。(仙台市太白区N・W)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail johoh@clc-japan.com

編集後記

先月号より記事の執筆に携わらせていただくことになりました。吉成です。取材でいろいろな方とお会いする機会をいただき、とてもうれしく思います。まだまだ不慣れなことばかりですが、精進して参りたいと思います。どうぞよろしく願いたします。(吉成)

お知らせ

☆次号予告 特集「ラジオ体操でいきいき」

平成28年度 宮城県生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)養成研修

<生活支援コーディネーター基礎・実践研修>

【仙台会場】7月14日(木)~15日(金) 宮城県自治会館(14日)・仙台商工会議所(15日)

講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)、大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)、志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

平成28年度 宮城県生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)応用研修

<応用研修4> 協議体の立ち上げと運営の方法 【仙台会場】7月1日(金) エスポールみやぎ
講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)、佐藤 寿一(宝塚市社会福祉協議会 常務理事 兼 事務局 局長)、池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

<応用研修3> 生活支援コーディネーターによる実践報告&事例検討会

【仙台会場】7月28日(木) 太白区中央市民センター

講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)、大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)、志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)